

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 117 Jul.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 117 Jul. 2024



花

特集

山の案内者

受け継がれていくもの

母の日の花屋さん

記憶のなかの花

文大と生きるつるりん

梅雨をいろうどる

「花屋っぽくない」のわけ

FIELD·NOTE no.117 Jul.

特集

花

08 山の案内者

11 受け継がれていくもの

14 母の日の花屋さん

17 記憶のなかの花

20 文大と生きるつるりん

22 梅雨をいろいろどる

25 「花屋っぽくない」のわけ

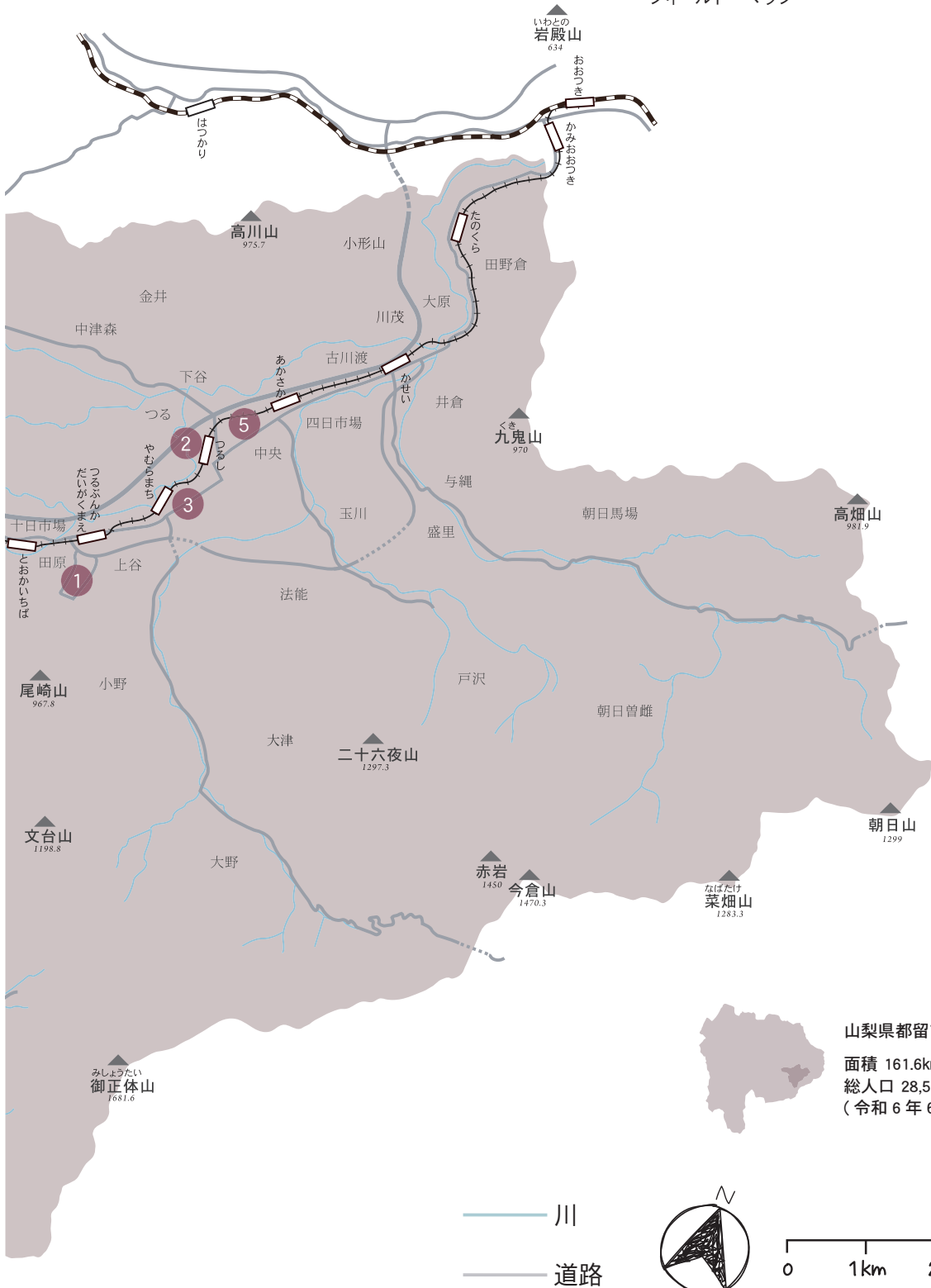
- 
- 30 センサーカメラが写した動物たち
- 32 一緒につくつてみんなで食べる
- 36 楽しむことを大切に
- 39 ムササビ観察日記
- 40 写真が教えてくれること
- 42 都留のまち探検隊
- 50 フィールド暦
- 52 都留の風景写真集

ギャラリー写真：長慶寺のバイカモ。ひんやりとした湧き水のなかで凜と咲いている（2024年5月16日）
表紙写真：アザミのつぼみを真上から撮影した写真。つぼみには小さな昆虫が訪れていた（2024年6月30日）

TSURU

Field・map

フィールド・マップ



山梨県都留市
面積 161.6km²
総人口 28,554 人
(令和 6 年 6 月現在)



特集取材先

① 都留文科大学周辺

P8 山の案内者 

P14 母の日の花屋さん 

P20 文大と生きるつるりん 

P22 梅雨をいろどる 

② 都留市駅周辺

P25 「花屋っぽくない」のわけ 

③ やむらまち 谷村町

P17 記憶のなかの花 

④ おおはた 大幡

P11 受け継がれていくもの 

その他取材先

① 都留文科大学周辺

P40 写真が教えてくれること

⑤ 赤坂駅周辺

P32 一緒につくってみんなで食べる

P36 楽しむことを大切に





特集

花

寒さが和らいでくると
たくさんのつぼみが花ひらきます

桜の木のしたで、食事を楽しみながら
会話を交わすとき
晴れた庭で、じょうろを手に
朝顔に水をやるとき

人びとの生活は花に彩られています

私たちの身のまわりには、
どんな花が咲いているのでしょうか
人はどのように花を楽しんでいるのでしょうか

花に惹かれる気持ちをたよりに
気になる場所に足を運びました



山の案内者

うぐいすホールの裏に、ミツマタの群生地があるのをマップ上で見つけた。「ミツマタ」というのはじめて聞く名前に興味を惹かれる。調べてみると、3月から4月にかけて黄色い花が咲く落葉低木植物だそう。枝が3本に分かれているという特徴から、その名前がついた。枝は和紙の原料にもなるようだ。開花したミツマタをじっさいに見てみたくなった私は、群生地を目指して山に足を踏み入れる。



ミツマタに会いに行く

3月中旬、首をなでる風は少しひんやりしているが、歩いていても寒さはそこまで気にならない。日なたを歩いていると、ぽかぽかと暖かった。

ミツマタ群生地へは、本学の裏にあるいくつかの登山道から行くことができる。私は、バイオトイレが目印になって分かりやすい、楽山球場登山口から登ることにした。トイレ付近の看板にしたがつて山道に入ってみる。木が日差しを遮っているため涼しい。歩くのにちょうどよい気温だ。

道なりにずっと歩くと、視界の右上に白っぽいものが映る。目線に移すと、山の斜面に細い枝の低木がたくさん生えていた。ミツマタかもしれない、と期待しながら手前に生えている木に近づく。よく見てみると、木の先に笏(もろ)のような形のつぼみが集まっている。外側は薄い黄緑色をしているが、つぼみの内側は黄色だ。

つぼみから少し離れて、木の全体を観察してみる。細い枝は3つに枝分かれしていて、先端にはつぼみが2つほどついている。私が



図鑑で見た花のすがたとは異なっており、すぐにミツマタのつぼみだと気づくことができなかった (2024年3月19日)

知っているミツマタの花の特徴にぴったり当てはまる。登ることができそうな場所を探して道の先へ進むと、「ミツマタ群生地」と書かれた看板を見つける。ようやくミツマタに会えたことがうれしくて、思わずガッツポーズをした。

花が開きはじめてのものと、まだつぼみのものとを比べてみよう。じつと近くのミツマタを見てみる。すると、開花が進んでいるもののほうが、花が上を向いていることが分かった。すべての花が開くと、よく図鑑に載っている鞠(まり)のような形の黄色い花になるのだろうか。これからどんどんミツマタが咲いていくようすを想像すると、満開になるのが楽しみになる。

よく見る

5日後、ミツマタのようすに変わりがなか確かめたくなり、ふたたび群生地を目指す。少し手が冷たくなるくらい風はひんやりしているが、楽山球場登山口に着くまでに体は温まっていた。先日と同じ登山道を歩いているにもかかわらず、前よりも群生地が遠く感じる。早くミツマタに会いたい気持ちが先走っているのかもしれない。

群生地に到着した。斜面に群生しているミツマタを登山道から見上げると、斜面全体が前よりもあきらかに黄色く色づいている。開花が進んでいるようだ。遠目で見ると、黄色とクリーム色の小さな花が交ざっているように見える。近づいてみると、オレンジ色のめしべが黄色の花弁に囲まれていてかわいらしい。一つひとつはとも小さい花弁だが、枝の先に集まることで丸い形になっている。やわらかで落ち着いた印象だ。

周りの広葉樹は冬に葉が落ちて枝だけになったままだ。森のなかで黄色く色づくミツマタは、一足先に春の便りを私へ届けてくれているようだ。

ミツマタが丸くなるまで



満開の状態。2つの花が枝の先についているが、球体には見えない（2024年3月14日）



中央の花弁が枯れはじめている。一つひとつの花が上を向き、丸くなってきた（2024年4月2日）



花弁の縁が黒ずみ、若葉が生えはじめた。ようやく球体になった（2024年4月14日）

山へ誘われて

「ミツマタ観察会」という都留市主催のハイキングイベントが3月31日に行われるらしい。ミツマタに興味を持つ人がどれほどいるのか気になって、参加してみることにした。

集合場所である都留市役所に到着すると、ハイキング用の服や道具を身に着けた参加者がたくさんいた。そこまで険しいハイキングだとは想像していなかったため、私は普段着とショルダーバッグしか身に着けていない。

準備不足を不安に思いながら登山口を目指して移動していると、「このあたりの人ですか」と岡本誠さん（66）が私に声をかけてくださった。お互いひとりで観察会に参加していることが分かったため、一緒にハイキングをさせていただくことにした。

観察会は、谷村にある水力発電所の近くにある登山口から始まる。富士山展望台、パノラマ展望台に寄ってから、都留アルプスのハイキングルートを進んでいく。かなり高低差があるため、参加者は各自のペースで休憩をとっている。なかには軽食を食べている人もおり、ピクニックのようで楽しそうだった。

都留市役所から3時間ほど歩いて、ようやくミツマタ群生地にたどり着く。斜面の上から群生地を一望すると、全体がミツマタによって黄色く色づいていた。以前、訪れたときは、うすい黄緑色のつぼみが残っていたが、今はもう満開だ。たくさん歩いて乱れた呼吸を整えようと深呼吸すると、ほんのりと甘い香りが鼻をくすぐる。周囲の木や土のにおいが混ざり、落ち着いた香りがただよっている。

「やはり、とてもきれいですね」息をもらしながら岡本さんはカメラを取りだし、満開になったミツマタに向けてシャッターを切る。岡本さんは昨年も観察会に参加されたそう。何度も足を運びたくなる引力のようなものを、ミツマタは持っているのだろう。

ゴール地点である田原^{たはら}の滝に着くと、テントが張ってあった。「お疲れさまでした」とテントのなかにいる人たちが笑顔で迎えてくれる。ねぎらいの言葉と笑顔で、疲れが和らいだ。記念に、都留市が特別に作った缶バッジと、ゴールを祝う賞状をいただく。ささやかだが、自分の頑張りが形になったことが嬉しい。せつかなので、記念品を手に岡本さんと一緒に写真を撮らせていただいた。

あとから聞いた話だが、私が参加した観察会には、300人ほどの参加者が集まったそうだ。ミツマタの花に誘われて、こんなにもたくさんの方が山に訪れているとは想像もしていなかった。好奇心のまま足を運んでみたり、ふたたびミツマタを見るために群生地を目指したりと、それぞれに異なる想いで参加したのだろう。

* * *

名前に惹かれて群生地を訪ねると、花が開く前のミツマタに出会った。初が集まっているような形のつぼみを見るのははじめてで、開花のようすを想像すると胸が躍った。やがて満開になると、ミツマタは多くの人を惹きつけ、山へと誘っていた。ミツマタを見るために何度も山を登る人がいるほどだ。

ひとつの花は小さくて目立たない。しかし、山の斜面に群生していることによって、やわらかな黄色い花がきわだつ。葉のくすんだ濃い緑色や木々の褐色のなかでひっそりと咲くミツマタのすがたは、私の心にしつかりと刻まれた。

高橋美唯（地域社会学科2年） 文・写真

受け継がれていくもの



上大幡の八房の梅

都留市には、市の天然記念物である「上大幡の八房の梅」がある。八房

の梅は、ひとつの花が咲き終わると8つの実がなる不思議な植物だ。そして、この梅の木は個人のお宅の庭にあり、安田七朗さん（82）が管理をしている。天然記念物が身近にある暮らしとは、どのようなものなのだろう。八房の梅を見に、大幡地区へ向かうことにした。

5月上旬、都留市駅からバスに乗り、梅を管理している安田さんのお宅に向かう。よく晴れていて、バスの窓からは、太陽に照らされた新緑がキラキラと輝いているのが見える。20分ほどバスに揺られると、四方を山に囲まれた大幡地区に到着した。

バスを降りた瞬間、緑の多さに圧倒される。大幡地区は、都留市の中でも自然との距離が近い地域のようを感じる。少し歩くと、ひととき目立つ大きな家を見つけた。ここが安田さんのお宅だ。

「いい時期に来たね」と言いながら安田さんが迎えてくれた。八房の梅



都留市役所に設置されているマンホールの蓋。市の花に梅が指定されている（2024年3月27日）

は、自宅の裏庭にあるという。さっそく、案内していただくことにした。

ひっそりとした裏庭では、安田さんの自宅に寄り添うようにして梅の木が植えてある。一緒に木を眺めながら、安田さんが八房の梅について説明してくれた。「八房の梅には、めしべが8つとおしべがひとつあるんだ。咲いているときは、普通の梅と同じように見えるけど、実ができる時期になると、他の梅とは違う特別さが出てくるんだよ。小さな梅の実は、密集していてかわいらしい。」

安田さんは、地面からたくましく生える梅の幹を「すごい丈夫なんだ」



梅の幹。毎年、積雪の重みに耐えながら木を支えてきた（2024年5月3日）

と自慢げに見せてくれた。なんと、この八房の梅は樹齢が約300年だという。10年ほど前に、大雪で木が根本から折れてしまったそう。しかし、現在でもたくさん実をつけ、元気に育っている。折れても梅を支え続けている頑丈な幹のおかげなのだろう。

長い年月のあいだ、変わらずに花を咲かせ、実をつけている梅のすがたは、誇りに満ちているようだが正しい。実がたくさんなっている時期に見ることができたのは幸運だった。

上大幡のナシ

安田さんのお宅で、思いがけない嬉しい出会いがあった。前庭に、県の天然記念物に指定されている「上大幡のナシ」があつたのだ。昭和35年、梅の木よりも先に、天然記念物に登録された。敷地内に2つの天然記念物があることに驚いてしまう。

大きなナシの木は、首を直角にして見上げても陽の光で木のてっぺんが見えないほど高い。以前、夜中に、突風で大きな枝がドサツと折れ、それとともに木を支える鉄柱が倒れたという。それでも、毎年4月には、白いきれいな花を咲かせるそうだ。

「昔は、実がたくさんなるから重さで枝が下がるほどだったんだ。でも、最近は実はならないね」と安田さんは悲しげに話す。

今まで私の身近にあつた天然記念物は、どれも神社やお寺などで手厚く保護されているものだった。安田さんのお宅に植えられている梅とナシの木は、家という個人の生活に近い場所にも、天然記念物の存在があることを教えてくれた。

受け継がれてきたもの

安田家の歴史は長い。玄関の上の壁に、「文化」という江戸時代の元号が記されているほどだ。現在安田さんが住んでいるこの家も、代々受け

継がれてきたそう。縁側に座り、屋根裏を見上げると、かつての茅葺き屋根が顔をのぞかせている。

安田家の人びとが同じ土地で暮らしてきたと聞くと、八房の梅やナシが誰によつていつ植えられたのか気になる。しかし、家主である安田さんでさえ分からないという。「江戸時代に家を建てたときに、すでに八房の梅の木やナシの木があつたかもしれないね。それか先祖がたまたま特別な木があつたところに、家を建てたのかもね」と笑いながら話す。



上：ナシの木に寄り添う安田さん。以前は、1本の木から2種類のナシが採れたそう
下：八房の梅の木の下には池がある。少し前までコイが泳いでいた

2本の木は、安田さんのお父さんが天然記念物に登録したという。登録の申請には複雑な手続きが必要で、時間がかかるそう。そのため、安田さんのおじいさんの代から、県や市に天然記念物へ登録する話を持ちかけていたかもしれないという。「おじいさんは、山梨県議会議員を務めたこともある人で、天然記念物の登録に積極的だったんじゃないかな」。おじいさんからお父さん、そして安田さんへ、梅とナシの木が天然記念物として代々受け継がれてきたのだ。



安田さんの家。前庭（写真左）に県の天然記念物である「上大幡のナシ」があり、裏庭（写真右）に市の天然記念物である「上大幡の八房の梅」がある

思い出をつなぐ

安田さんのお父さんは、八房の梅で梅酒をつくっていたという。天然記念物の梅でつくられたお酒は、どんなに特別なのだろう。不思議な味がするに違いない。想像を膨らませていると、安田さんは「食べるのには向いていないんだ。8つに実の栄養が分かれてしまうから、最後に残った実はあまり美味しくないんだよ」と教えてくれた。実がたくさんなると聞いた

ときから、八房の梅は食用だと思っていた。どうやら、観賞用らしい。満開に梅の花が咲いている時期にも、安田さんのお宅にうかがってみた。

思い出話を聞いていると、これまで梅やナシとともに生活をしてきた安田家の人びとのようすが浮かんでくる。天然記念物に認定されることによつて受け継がれるのは、木だけではない。無意識のうちに、木と共に生きてきた人びとの思い出も残されていくのだろう。

育て続ける理由

安田さんは「梅もナシも幹はしっかりしているけど、全体が傷んできているんだ。これから先がちよつと心配だね」と不安そうに話す。天然記念物に指定されているので、木の維持には市や県の助けを借りることができ。しかし、樹齢が何百年もある木を、花が咲くように育て続けることは簡単ではない。

管理が大変でも、木を大事にし続けている理由をたずねる。すると、「自分が生まれたこの家で代々受け継がれているからだね。あと、天然記念物に認定されているから見にくれる人も多いんだ」と嬉しそうに答えてくれた。

八房の梅とナシの木が受け継がれ、育てられ続けてきたのは、安田家の人びとに、この2本の木を大切にしたい気持ちがあつたからだだろう。そして、その想いが2本の木を大木に育て、安田家の人びと、梅とナシを

鑑賞しにくる人びとの関わりをうんだのだろう。



上大幡の八房の梅を見に行くと、天然記念物という肩書きを持ちながらも、安田家の暮らしにとけ込んでいる。2本の木のすがたがあつた。

梅とナシの2本の天然記念物は、暮らしのそばにあることで、育てている人の思い出の一部として残り続けている。そして、新たな人びととのつながりがうまれている。

日常生活のなかには、桜や桃のように長いあいだ大切に親しまれ、花を咲かせている植物がたくさんある。天然記念物だけでなく、身近に咲き、生活を彩る植物には、育て続けてきた人の想いが込められているはずだ。安田家の人びとの気持ちを受け継ぐ梅とナシの木は、これから先も私の目に鮮やかな思い出として映り続けるだろう。

根本菜桜（比較文化学科2年）
Ⅱ文・写真



八房の梅の実。8つの実のうち成熟できる実は2つか1つだけだ。他の実は、成熟する前に地面に落ちてしまう



お店のドアを開けると、たくさんの種類のカーネーションが出迎えてくれた（2024年5月10日）



母の日の花屋さん

卒業式や入学式、お花見など、春は花を身近に感じるイベントが多い。5月の第2土曜日は、カーネーションを贈ったり、日ごろの感謝を伝えたりする母の日だ。母の日の準備は、お店でプレゼントを買っただけだったけれど、花屋さんはどんな準備をしているのだろう。母の日の花屋さんのようすが知りたくて、本学近くにある「HANASAKA JISAN」に足を運んだ。

久永奈央（地域社会学科2年）＝文・写真

都留の人が親しむ花屋さん

お店にうかがったのは、あいにくの雨の日だった。お店までの道は、傘を差しうつむいて歩いていたので、気分もさがってしまふ。

店舗の外観は黒で統一されていて、スタイリッシュな雰囲気がただよっている。ドアを開けると、花の香りとゆつたりとしたテンポのBGMに包まれる。先ほどの落ち込んだ気持ちが吹き飛んだ。手前には、アジサイやカーネーションがところせましと並んでいる。奥のほうに進むと、プチギフトコーナーがあった。商品には手書きのポップが添えられているものもある。お店のこだわりの商品なのだろうか。

くわしくお話をうかがったのは、小河原陽子さん（57）だ。34年前、花屋さんで働いていたご主人の利修さん（57）が独立してお店を構えたという。花は利修さんが、雑貨とカフェは陽子さんが担当しているそう。カフェを開きたいという陽子さんの夢を、利修さんが叶えてくださったそうだ。

「雑貨を仕入れるときに気をつけていることは、簡単に言うと『万人受け』することかな。

みんなに喜んでほしいから」と陽子さんは話
す。店内に飾られている手書きのポップから、
きつと陽子さんの細かいこだわりがあるのだ
ろうと思っていたので、「万人受け」という
言葉に驚いた。この言葉はありきたりなもの
に対して使うことが多い気がしたからだ。で
も、お店が目指す「万人受け」はどこか違う。
これをあげたらどんな表情をしてくれるだ
ろうと想像したくなるような、素敵な商品が
店内にあふれている。陽子さんの「たくさん
の人に喜んでほしい」という想いが、商品を
通して、プレゼントをもらう人にとっての唯
一無二のものになっているのだ。「万人受け」
で「唯一無二」を生み出す。こだわりがつまつ
たお店だ。

都留のお客さんは、温和で、堅実な人が多
い印象だそう。「売れる商品は、8割がプレ
ゼント用だね。ゴージャスなものではなく、
ささやかなプレゼントをしている人が多いか
な」と話す。お話をうかがっていた30分ほど
の時間でも、お客さんはひっきりなしにやつ
てきた。ここは、都留の人が親しんでいる花
屋さんなのだ。私も、母の日のプレゼントを
ここで選ぼうと決めた。



右：手書きのポップ。商品の効能や特徴がわかりやすく書かれていた（2024年6月28日）

左：店内のプチギフトコーナー。ハンカチやマグカップなどたくさんの商品が並んでいる（2024年5月10日）

母の日の花屋さん

母の日が近づいた5月のはじめ、もう一度
お店へ足を運んだ。お店のドアを開け、目に
飛び込んできた店内の色鮮やかさに思わず息
を飲む。赤色・ピンク色・黄色などのカーネー
ション、水色や白色のアジサイがきらきらと
光っていた。店内は、母の日らしいあたたか
さで満ちている。大きく息を吸い込むと体に
花の甘い香りが行き渡って、自分が花束のな
かの一輪になったような気がしてくる。なん
て幸せな空間なのだろう。

今日は、私も鹿児島に住む母への贈り物を
選ぶことにした。かごに入った花や鉢植え、
ハンカチやマグカップなど商品の種類がとて
も多い。一緒に来た友人の顔を見ると、わか
わくしたようすで商品を選んでいた。友人の
笑顔を見て、私まであたたかい気持ちになる。

お店に来ていた小学生くらいの男の子が、
鉢植えを抱えてレジに運んでいた。母の日の
プレゼントだろうか、照れくさそうなようす
だ。身近な人ほど、感謝を伝えるのは少し恥
ずかしくなってしまう。気持ちがよくわかっ
て、応援したくなった。

花屋さんの準備

母の日に向けて花を準備するようすを少しだけ見せていただいた。陽子さんの作業台はレジの後ろだ。6段の棚に入りきらないくらい、たくさんのリボンが入っている。色や素材がばらばらで、リボンを見るだけでもわくわくする。作業台の上には、テープやはさみ、包装紙、ホッチキス、そしてたくさん注文票がある。

花束を作るようすを見せていただく。まずは、花の種類ごとに分けられているバケツから花を集め、輪ゴムでまとめる。白い半透明



陽子さんが花束をつくるようす

の包装紙をはさみですーっと切り、あつという間に花束を包んでいく。そして、うすい黄緑色の包装紙でもう一度包む。正面から見栄えを確認し、微調整を繰り返す。包装紙の広がり方や細かいところまでこだわっているのだ。指にはいくつも絆創膏が見えた。接客をしているときのこやかな表情とは違う、陽子さんの真剣な眼差しに心が惹かれる。

花束が完成したようだ。「よし」というように陽子さんの表情が少しほころぶ。私も一緒にほつと息を吐き出した。時計を見ると、花束を作り出してから、あつという間に3分が経っていた。息をすることを忘れてしまいうそうになるほど、集中して見ていたようだ。

都留の花屋さんから

やつと、母へ贈るプレゼントを決めた。優しいピンク色のドライフラワーと、水色のガーゼハンカチだ。いつも月曜日に、「今週も頑張ろうね」と連絡をくれる優しい母だ。母のイメージにぴったりの優しい色合いのドライフラワーにのって、感謝の気持ちが届けばいいな、と願う。私が都留の花屋さんからプレゼントを贈りたいと思う理由は、このま

ちで暮らし、感じてきた気持ちも込められるからだと気づいた。都留の花屋さんには、花を贈ることのあたかさを教えてくれた。

* * *

花は気持ちを形にしてくれるものだ。「ありがとう」、「おめでとう」、「これからよろしくね」、「大好きだよ」。HANASAKA JISANの花や雑貨は、渡す人が気持ちをきちんと言葉にする勇気をくれる。それは、花屋さんが一つひとつの花や雑貨に真心をこめて、向き合っているすがたを知ることができたからだ。私も想いを伝えるときは、恥ずかしがらず声に出して伝えてみよう。カーネーションが、背中を押すように優しく笑ってくれた気がした。



カーネーションの花言葉は、色によって異なるそうだ

記憶の なかの花

私は、本誌『特別号 暮らしのそばでつながる記録』（2024年3月19日発行）において、戦前の大手通りのようすについて記事を書いた。当時の写真を見ると、道の両側に桜の木が立っていたことがわかるが、現在は、当時の面影はほぼない。モノクロの古写真からでも伝わる桜の美しさに惹かれ、当時の桜を知るかたを訪ねることにした。



大手通りは、都留市立図書館と都留市立谷村第一小学校のあいだを通る。現在は、桜に代わってポールが並ぶ（2024年6月29日）

通学路を彩る桜

大手通りのすぐそばで渡辺酒店を営む、わたなべたかし渡邊孝義さん（82）にお話を聞くことができた。渡邊さんは昭和17年生まれで、大手の桜をじっさいに見たことがあるという。渡邊さんは「昔のことだから、もしかしたら違うかもしれないけれど」と前置きしつつ、私の持ってきた古写真と古地図を頼りに、当時の大手通りについて語ってくださった。

渡邊さんは、小学3、4年生のころに見た大手通りの桜が強く印象に残っているという。「きれいだったよ、通りに沿って数本並んでいたさ。当時自宅が大手通りに面していて、2階から眺めることができた。それに、大手通りの先に小学校があったから、友だちと桜並木のなかを通って小学校に通っていたんだ」と昔を懐かしむように教えてくださった。

渡邊さんが小学3、4年生ということ、昭和27年ごろということだ。古写真は戦前に撮られたものだが、戦後もしばらくは大手通りに桜の木が残っていたのだろうか。写真だけではわからない空白の部分が埋まっていくように、お話を聞くのはとてもわくわくする。

自然のままに

私の並木のイメージは、枝が剪定せんていされていて、人の手によって整えられているというものだった。しかし、古写真を見ると、桜の木がそれぞれ枝を交差させながら、思いのままに育っているように見える。

当時はどのように桜の木が管理されていたのか渡邊さんに聞いてみる。すると、古写真に目を落として「記憶の限りでは、特にきわ立つ手入れがされていたようすはなかったな」と教えてくださった。「自然に近い状態だったんですね。それはきれいだったでしょう」と言うのと、「そうだね、だから記憶に残っているのかもしれない」と少し顔をほころばせた。渡邊さんが大手通りの桜に親しみをもっていたことが伝わってくる。

「当時の大手は砂利道でね、今のよう舗装されていなかった。車も走っていないくて、人たちがほら歩いている感じだったね。だから、桜並木もあいまっておだやかな雰囲気だった。荷車が置かれていたり、焼き芋屋さんがいたり、干物屋さんが干物を干してたりしていた」。大手通りに桜があったころは、現在よりもゆつ

「青葉の頃」



「櫻」



大手通りの四季

季節によって大手通りの桜は違った表情を見せていた。春は花びらが道を覆い、花が散ると青葉が茂り、冬になると枝々の先に雪の花が咲く。

たりと道が使われていたようだ。当時の人びとにとって、道は通るだけのものではなく、生活の場でもあったのだろう。そして桜の木が、そういうまちの在りようを象徴していたのではないだろうか。

変わりゆくまち並み

渡邊さんは、桜の花が咲いているのを見た記憶はあるそうだが、桜の木が切られているのを見た覚えはない。なぜ切られたのかもわからないのだという。ただ、桜があったところと比べ、桜がなくなつたあとの谷村^{やむら}のようすは激変していったのだとか。「昭和50年代に入つて車が進んだん普及していくと、道が舗装されたりしてまち並みも変わつていったような気がするよ」。時代の移り変わりのなかで、大手通りもすがたを変えていったのだろう。

そんな変わりゆくまち並みのなかでも、昔の面影を感じることができる。「当時は裁判所のまわりにも、ぐるっと桜の木がいつぱい立っていてね。それも今はないけれど、前庭に立っている木はその名残りじゃないかな」と教えてくださつた。古写真と現在のようすを見比べ、まったく違うと感じていたが、少しでもその面影が

残っていてうれしくなる。帰りに、裁判所の前を通つて、桜の木を見ていこうと決めた。

切られた桜並木

当時の大手通り周辺により興味を持った私は、長安寺^{ちやうあんじ}の元住職である花園光明^{はなわのみつあき}さん（88）にお話をうかがうことにした。長安寺は、大手通りから徒歩3分ほどの場所にある。花園さんは昭和10年生まれで、戦時中の大手通りについて教えてくださった。

花園さんは大手通りの桜並木については記憶に残っていないという。「どうも私は、大手通りで桜が並木になつていったつていう記憶がない。砂利道だつたつていうのは覚えてるのだけだね」と古写真をじつと見ながら語る。渡邊さんのお話と食い違いがあるので、少し戸惑つたが、くわしくお話を聞いてみることにした。

私が「どうして木が切られたのでしょうか」と聞くと、「戦争で使うために切られたんじゃないかな。当時は何でも不足していたけど、薪になる木もなくてね。ただ、私も木を植えてたことがあるけれど、昔は木を切つては植えて、切つては植えていたから。いつなくていつあつたかは定かじゃないよ」とおっしゃつた。

「雪景色」



「落葉の頃」



※ 「」は各写真につけられたタイトル

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールドミュージアム部門 2012 年

花園さんのお話から、もしかしたら、大手通りに桜が常にあつたわけではないということがわかった。都留にも戦争の影響がおよび、人びとが必要に駆られて木を切ったのだろうか。生活のすぐそばにあるからこそ、その影響を受けやすかったのだろう。

桜のなかの入学式

花園さんは、大手通りのすぐ先にある小学校に通っていた。そこに植えられていた桜が、強く印象に残っているそう。「桜の花が咲き誇っているなかで、小学校の入学式をやったんだよ。とってもきれいでね。小学校の前にある道に沿って校庭に桜の木が並んで立っていて。たくさんあつたと思うな」と笑顔でくわしく語ってくださった。さらに、「当時は小学校に立派な門があつてね。門を入ったところに奉安殿（※）があつた。毎日お辞儀をしてその前を通るんだけれど、そのまわりにも桜の木があつたんだよ」と、戦前の小学校のようすについて教えてくださった。

花園さんがいきいきとお話してくださるのを見て、年月が経つても人の心を揺さぶる桜の魅力を、あらためて実感する。やはり子ども

のころに見た情景は、記憶に残りやすいのだろう。現在は小学校のようすもだいぶ変わっているが、桜と入学式の組み合わせは、いつの時代も春の風物詩のようだ。

* * *

古写真のなかのモノクロの桜は、私を惹きつける。目の前で咲く桜のほうがずっと色鮮やかだし、匂いをかいだり手で触れることができる。それにもかかわらず、私は古写真のなかの桜をじつと見てしまう。

当時の都留では、人のごく近く、人の生活のなかで桜が咲いていた。大手通りに桜があつたころは、もつと草花と人の生活の距離が近かつたのだ。だからこそ、半世紀近く経つた今でも、桜の花が渡邊さんと花園さんの記憶を彩り、より印象に残る大切なものになっているのではないだろうか。

今ある風景は、決して永遠のものではない。しかし花には、人の記憶に残り続ける鮮やかさや力強さがある。古写真を手にまちを歩けば、そのすがたがありありと目に浮かぶ。来年の春は、カメラを持って花見に出かけてみよう。北原日々希（地域社会学科2年） 文・写真

文大と生きるつるりん

本学1号館とグラウンドのあいだに林がある。入り口の掲示板には、「つるりん」という名前で紹介されていた。つるりんには、どんな草花が息づいているのだろう。そして、つるりんとはいったいどのような場所なのだろうか。

はじめてのつるりん

4月19日、地域交流研究センター協力研究員の菊池香帆さんと一緒に、つるりんの観察に行く。春らしいぽかぽかした天気だが、つるりんのなかは木陰のおかげが涼しい。入り口をふさぐようにモミジが枝を伸ばしていた。葉を見てもみると、まだ折り畳まっていたあとが残っている。これから手のような形へと生長していくのだろうか。

モミジの横を通り抜けて数メートル歩くと、ビニール紐で囲まれている一角があった。そこに、長さが20センチほどの葉が2枚地面から生えている。そのあいだから一本の茎が伸びていて、先端にそら豆のような丸い、ぷっくりした何かがついている。おそろおそろ触ってみると、すべすべしていた。菊池さんによると、これはカタクリという珍しい植物なのだそう。本学の学校教育学科の教員である、別宮有紀子先生が植えられたのだという。

5月1日、雨の降っているなか再び観察に向かう。雨だからか、土のにおいが強く感じられる。カタクリを見ると、前回と同じすがたで生えていた。雨であたりが暗いため、ひっそりとたたずんでいるように見える。まだ枯れていなくてよかったと胸をなでおろした。

カタクリとつるりん

どうして別宮先生は、つるりにカタクリを植えたのだろうか。カタクリとはどのような植物なのだろうか。疑問を抱えて、別宮先生のもとをたずねた。別宮先生はつるりんの保全を行っており、ご自身が担当する生物ゼミでもつるりに生息する生き物を見守っている。



カタクリの実
(2024年4月17日)
(菊池香帆さん=写真提供)

つるりんのカタクリは、約20年前に別宮先生がまいた種が育ったものだという。当時受けもっていた学生の、卒業研究の対象がカタクリだった。それをきっかけに、山梨県内では限られた地域でしか自生していないカタクリの種をもらい受けたそう。カタクリの種が途絶えることがないように、先生はもらった種を学内に植えることにした。

つるりんには冬から春にかけて葉を落とす木が多い。すると、ちょうどカタクリが地上に葉を出す4月から5月のあいだは日光が当たる。この期間にカタクリは光合成を行い、花を咲かせる。光が当たりすぎても水不足で枯れてしまうが、つるりんは校舎のすぐそばにあるため、日陰がでやすい。それに豊富な土壌と落葉があることで、水を含みやすく、乾燥を防ぐことができる。つまり、つるりんはカタクリが生きるのにとても適した場所なのだ。

つるりん で出会った植物



①つるりんの木々 (2024 年 6 月 19 日)



②カタクリの花 (2024 年 4 月 3 日)
(菊池香帆さん=写真提供)



③クサノオウ (2024 年 5 月 19 日)



④キランソウ (2024 年 5 月 16 日)

春先に花を咲かせたあと、カタクリは実をつける。19日の観察で触った、すべすべしたそら豆のようなものの正体だ。実のなかには種が入っていて、その種が地面に落ちることで、新しい命が芽吹くのだという。

文大とつるりん

そもそも、つるりんとは本学にとってどのような場所なのだろうか。別宮先生によると、つるりんが作られたのは約45年前、本学にまだ1号館しかなかったころのことだ。教職員が、山から持ってきた苗木を1号館とグラウンドのあいだに植えた。現在約70種類もの木がつるりんに生えている。

つるりんが作られたきっかけははっきりしないが、今では本学の学生にとって欠かせない場所になっている。つるりんは1号館の南側にあるため、教室に日が直接差し込んでくるのを防ぐ。また、つるりんにはグラウンドで使われたボールが飛び込んでくることもある。つるりんがなければボールが教室に飛んでくるかもしれない。別宮先生は、「つるりんは天然のクーラーとフェンスの役割を果たしている」と教えてくれた。教室の横でゆさゆさと揺れている

木々は、じつは私たちの学校生活に寄り添ってくれているのだ。そう思うと、「いつもありがとうね」とつるりんの木たちをいたわりたくなる。つるりんは植物と学生の両方にとって、いくつもの役割を果たす。しかしつるりんを訪れる学生は多くはないそうだ。自然が豊かであるということとは、人の目には雑多に映ってしまうことがあり、立ち入りにくくなってしまうからだ。別宮先生は「今後、つるりんを人と生物多様性が共存できるような場所にしていけたら」とおっしゃった。

* * *

身近であるがゆえに、今までつるりに目を向けることがなかった。足を踏み入れてみると、カタクリをはじめとした、いろいろな種類の草花が息づいている場所だと気づいた。自然の豊かさは、つるりんが40年以上をかけて本学とともに生長し続けてきた証なのだ。これからつるりんでも暮らす植物たちがのびのびと育っていつてほしい。学生たちでにぎわうキャンパスで、今日もつるりんの草花はゆつたりと風に揺られている。

横山幸乃 (国文学科2年) 〓文・写真

梅雨をいろいろどる

都留市には、アジサイの花を楽しめる場所がいくつかあるそう
だ。「道の駅つる」付近や禾生地区^{かせい}がそのひとつだ。都留
のアジサイは、毎年6月中旬から7月中旬に見ごろを迎え
るという。花が咲くまでに、本学周辺のアジサイはどのよう
に生長していくのだろうか。

印南響（比較文化学科2年） 文・写真



アジサイ・マップ



アジサイはどこに

4月下旬、キャンパス内とその周辺を歩き、アジサイを探す。まず見つけたのは、本学までの坂を上つてすぐの場所だ。植え込みと建物のあいだを通る小道の横に、アジサイの大きな株があった。あざやかな緑色の葉がたくさん出てきている。ツヤツヤと光沢がある葉が生えた枝の先端には、去年の花らしき丸いかたまりがついていた。枯れて薄茶色になった花は下を向いている。まるでうなだれて、枝との別れを惜しんでいるようだ。

楽山公園^{らくやま}の坂道の両わきには、アジサイがずらりと並ぶ。いったい何株あるのか、数えきれない。午後の日差しに照らされて、葉脈が黄色に輝いている。2、3枚集まった葉の中心からは、新しい葉が顔をのぞかせている。小さくてかわいらしいので思わず触れると、薄くてしんなりしていた。生まれたての赤ちゃんのようなものだから、そつと触らなければいけなかった、と手をひっこめた。

体育館までの坂道を歩いていく。斜面の塀に沿って、アジサイに似た葉をつけた植物が生えていた。小さな粒を寄せ集めたような花をつけ



ている。花は白っぽく、色あせていて、どうやら枯れている。これも去年の花のようだ。どうして散らないのだろうか。

やまびこ競技場の近くにもアジサイが植えられていた。そばに立つサクラの木が花をつけているからか、アジサイのひよろひよろとした枝が目立つ。日当たりはとても良いはずなのに、あまり葉が出ていないのはなぜだろう。

道路を歩いていると、アジサイは民家の庭にもよく植えられているのがわかる。どの場所でも葉をつけ始めたばかりだ。これからどんな変化が見られるだろうか。

花びらのひみつ

アジサイとはどんな花だろう。あらためて図鑑を開いてみる。ガクアジサイの場合、花びらに見える部分は装飾花そうしやくかといって、がくが変化したものだそうだ。その中心に集まっている小さな花りようせい(両性花)に、おしべとめしべがある。装飾花は、花粉を運んでくれるハナカミキリなどの虫を誘うために発達したともいわれている。

図鑑に掲載されている写真を見ると、花びらは水彩絵の具を水でにじませたような色合いだ。私たちは、飾りの花の美しさを楽しんで

いるのか。アジサイにとっては飾りなのだとわかつていても、その繊細さに惹きつけられる。

花の特徴を知ってから、ふたたび楽山公園を歩いてみる。舗装された白い道二面に、赤茶色をしたサクラのがくが落ちていた。アジサイのようすは、一週間ほど前とあまり変わらない。枝のところどころに葉を出しているだけだ。

アジサイの葉の中心にサクラのがくがちよこんと乗っていると、花が咲いているように見える。サクラががくを落としているいつぼうで、その下のアジサイは、がくが変化した花びらにこれからつける。もともと同じ器官だったのに、見た目は大きく違うのがおもしろい。

アジサイの花が咲くのを早く見てみたい。少しずつ生長するようすを見てみると、気持ちちはやる。けれど、アジサイにとっては大事な花の準備期間だ。気長に開花を待つのもわくわくする。

花開くまで

5月下旬、授業終わりに、近くの植え込みにあるアジサイを、斜面の上からなにげなくのぞきこむ。「あ、つぼみができている」。上から見たことではじめて気がついた。私より背丈が

高いアジサイも多いから、ようやく現れたつぼみを見逃していたのだ。

楽山公園のアジサイはどうだろうか。そのまま、いそいそと向かう。以前にも増して葉が勢いよく出ている。まわりの木や草花もぐつと緑が深くなったようだ。先に出ていた葉はさらに大きくなり、まだ開く前の葉は丸まって待機している。ごく小さな丸いつぼみは、数枚の葉に大切そうに包まれている。薄黄緑色のつぼみがぎゅつと集まっていて、小さなカリフラワーのようだ。

道二面に落ちていたサクラのがくはなくなっている。いよいよ春から梅雨へ、サクラからアジサイへ、季節を代表する花は主役交代だ。去年咲いた花はまだ枝先に残っているけれど、目立たない。葉と新たなつぼみの勢いに押され気味だ。いきいきと生長していく植物のすがた



4号館うらのアジサイのつぼみ
(2024年5月23日)

は、雨の日が増えてきて沈みがちな気分を和らげてくれる。

* * *

6月初旬、都留のアジサイはまだ満開ではない。今はほとんど緑一色の場所が、青色やピンク色に色づく光景を思い浮かべると、より開花が待ち遠しくなる。

毎日のように植物のそばを通っても、花が咲いていないときにはつい忘れがちで、目を向けなくなってしまう。花が咲いたとたんにその香りはつとしたり、色や形に目を奪われたりするのだ。それだけ花が美しく、人を惹きつけるということでもあるだろう。

花が咲く前から、アジサイの変化を見つめてみた。去年咲いた花は儂^{はかな}げで、生え始めた葉はみずみずしい。ほころぶ前のつぼみは愛らしい。どんなすがたでも、咲いた花の華やかさに負けない美しさがあった。

梅雨は洗濯物が乾かないし、雨のなかを歩けばお気に入りの靴だつて濡れてしまう。それでも、アジサイが色づくのはこの季節だ。やつと色づいたアジサイを傘越しに眺めれば、心はほんのり晴れやかになる。



「花屋っぽくない」のわけ

都留市駅の裏道を進むと、「花&雑貨 リエール」と書かれた白い看板が置かれている。そこから数分歩いて右手にある、緑の木々に囲まれた建物がリエールだ。いままで訪れた花屋にはないような、不思議な空気をまとうドアの向こうをのぞき込んだ。

原口桜子（学校教育学科3年）＝文・写真



看板犬のちょび店長▷

リエールに訪れると

店の前を通りすぎてしまうほど、木造の建物と周りの木々がなじんでいる。駐車場に置いてある黒板に書かれた店名を確認し、営業が開始する12時ぴったりにドアを開く。店に入ると、淡い紫色や落ち着いた黄色の花が迎えてくれた。その隣の隣にある小棚と右手の棚には、ドライフラワーをあしらったキャンドルやリースなどの雑貨が並んでいる。

「ゆっくり見ていってくださいね」と店主の三澤賢子さん（57）が声をかけてくれた。ありがとうございます、と気になったいたキャンドルを手にとり、じっくり見る。淡い色や手作りの雑貨を見るのが大好きなので、思わず「わあ」と小さく息をついて見とれてしまう。このキャンドルをベッドのそばに飾ろう。何度も棚を往復して決めた。

あらためて店のなかを見渡すと、花屋というより、森にたたずむ秘密の小屋のようだ。カーネーションやバラといった花屋でよく見る鮮やかな花は置かれていないし、値札もついていない。古道具や本が置かれた棚の前にはテーブルとイス、店の左奥にあるキッチン

やお菓子の置かれたショーケースまで、花屋にあるのが不思議なものばかりだ。それなのに、ちぐはぐには見えない。置かれているものすべてが、売り物というより、訪れた人の心を落ち着かせるためにあるようだ。

現在のリエールになるまで

三澤さんは、もともと雑誌などに使われる花に関わる仕事をしたいと思い、東京の花屋で修行していた。そのうち、自分が好きな花を仕入れたいという気持ちが増える。それに、お客さんの喜ぶ顔を近くで見ることのできる仕事にやりがいを感じた。そして、実家の土地に花屋を開くことにした。三澤さんはお店を始める前から、自分の理想とする花屋のかたちを考えていたという。

その想いは、「リエール」という店名にも込められている。店名を考えているとき、知り合いに「フランス語の先生がいるから相談してみたら」と言われたそう。なんとなくフランス語がいいと思っていたので、いくつか候補をもって相談に行く。すると、その先生は趣味でタロットをやっていて、タロットで店名を考えることになったのだという。



花と雑貨に囲まれたカウンターで作業する三澤さん。店の花は直感で仕入れる（2024年6月1日）

引いたカードに描かれていたのは、絡まったつたの前に立つ女性。そこで三澤さんが、フランス語でつたをなんというのか聞いたところ、「^{リエール}Heure」と言われた。そのとき、ピンと来たのだという。

「つたって丈夫で強そうだし、いろんなところに伸びて絡まって、（今になってみれば）うちもいろんなことがあったからぴったりだと思います」と三澤さんは笑って話す。若いころは、なんでもやってみようと模索していた三澤さん。30代のころ、自分のやりたいことがわからなくなったのだという。し

かし50代になると、そのなかから選択ができるようになり、お客さんが求めているもの自分のやりたいことの中間を目指すようになった。

私は、花屋に求められているものは、いつの時代も、お客さんの需要にあった花を提供することだと思っていた。驚いて「求められることが変わっていくのですか」と聞く。すると、今の時代は個性が大事にされて、花屋でも店主のおまかせで注文する人よりも、自分の好きな花を選ぶ人が増えているのだと話してくれた。新しい考えかたは、リエールならどうするかを見直して取り入れるという。

店にまかせるといふ考えかたが主流だった時代に、リエールですでに「お客さん自身が求めるものを」というありかたを大切にしていた。三澤さんは、「昔は人の目を気にしていたこともあったけど、自分の世界を追求して、それに興味がある人がいてくれたらお互いにとっていいことだと思う。それが一番自然だと思っている」と話す。

三澤さんはリエールのありかたを長いあいだ模索し続けてきた。そんななか、やりたいことが叶い始めたのはつい最近だという。

花とお茶に通じるもの

＋ cafe は、およ三ヶ月に1回、リエールと繋がりのあるカフェにきてもらい、お客さんに美味しいものを食べてもらうイベントだ。cafe 織水さん、cafe Natural rhythmさん、マルハチレトロさん、cremaさんの4軒がくる。お店のかたは昔から三澤さんと気心知れている人だ。

＋ cafe を始めるきっかけは、以前、花屋の営業が終わってからアレンジメント教室を開いていたところにさかのぼる。教室が終わつ



＜リエールのドライフラワーを使って、富士吉田のかたが作ったキャンドル。手作りのあたたかみが詰まっている（2024年4月14日）



＜三澤さんは「リエールでは、お花畑でお花をつむれ感覚で花に触れてほしい」と話す（2024年4月12日）



＜今回の＋ cafe でいただいた、cafe 織水さんの料理（2024年6月30日）

▽料理を待つあいだも会話がはずむ。三澤さんが撮影してくださった（2024年6月30日）



た後にほっとしてもらいたいという気持ちで、お茶をいれていた。そこでお茶を飲みながらぼつと出た話や、お茶を飲んだからこそ話せる話があると気づいた。「これは、お花とお茶に共通しているものだと思います」。たしかに、どんなに疲れていてもお茶を一口飲むとゆつたりと気持ちが落ち着く。同じように、部屋に花が一輪さしてあるだけで心が和む。花もお茶も、緊張した心をじんわりとほぐしてくれる力を持っている。店内のキッチンも、花のなかでおいしいものを、という気持ちで設置したものだ。

また、5月にマルハチレトロさんが古道具の委託販売を始めた。このスペースも、もとは店の外だった場所だ。理想の「リエール」でありたいという強い気持ちが伝わる。これからは三澤さんのやりたいことと時代に合わせ店のだが変化していくのだろうか。

* * *

リエールには、花だけでなくお菓子や雑貨、三澤さんのおしゃべりを求めてやってくる人もいる。リエールは、花と人だけでなく、人と人をつなぐ空間でもある。

三澤さんは「やりたいことがたくさんあった」と言っていた。それは、人と人がつながる空間には、花屋にはないものが必要だったからではないだろうか。

花を求めてやってきた人が、この空間を通じてものや人と出会う。お菓子を作っている店に行ってみよう。出会った人とお茶を片手に話したい。花を中心に、人の心が動いていく。リエールには、なにかに心を動かされる心地よさがある。三澤さんの想いは、私がはじめてここに訪れたときに感じた、「花屋っぽくない」空気に詰まっていたのだ。



特集まとめ

花

山や街を歩いて、
季節の訪れを告げる花のそばで、
たくさんの人と巡りあい、言葉を交わしました

私たちはどうして花に惹かれるのだろう
あらためて、考えてみました

「大切な人に花の美しい瞬間を贈りたい」
「いつもの風景が花で彩られますように」
「記憶のなかで咲く花の美しさを忘れないでいたい」
花との出会いの数だけ、想いが生まれます

季節は巡り

今咲いている花は、いずれ散ってしまいます
けれど、花に込められた想いが残っているから
私たちは、また花が咲くのを心待ちにするのです



センサーカメラが写した動物たち

―昼と夜のムササビの森―

私たちは、キャンパス周辺に設置したセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動でシャッターを切るカメラ）を使って動物の生息調査をしています。今回は、本学の第2・3クラブ棟の南側にある『ムササビの森』に、カメラを2台設置しました。『ムササビの森』は、スギやヒノキの人工林と、ケヤキやミズキなどの雑木林から成っており、さまざまな生きものが暮らしている森です。今年の2月から5月にかけて撮影した、昼と夜にそれぞれ活動している動物を紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

☀ 日中のムササビの森



シメ

太いくちばしを持っています。両足で跳ねているすがたが確認されました（2024年3月6日）



カケス

黒い羽に水色が入っているのが特徴です。センサーカメラにはめったに写りません（2024年4月5日）



コジュケイ

「チョットコイ」と聞こえる声で鳴きます。近年、数が増えているそうです（2024年5月21日）

Pick
Up

ニホンジカ



屋に活動しているシカのようなす。ツノを持っていないため、2匹ともメスのシカであることがわかります。体に白い斑点が見られないため、まだ夏毛に生え変わっていません（2024年4月24日）

夜のムササビの森



タヌキ

タヌキは、昼間は木の根元などで休み、夜になると活動します。この森で同時に2匹が映りこむのは珍しいです(2024年3月11日)



ニホンジカ

ツノが生え変わり始めているオスのシカです。本学周辺のアパートの敷地でもすがたが確認されています(2024年4月22日)



アナグマ

アナグマは、太くて鋭い爪で地面に穴を掘り、ミミズなどを食べます。昼夜を問わず、ひんぱんに活動していました(2024年2月29日)



ノウサギ

この森では、すがたを見かけることはほとんどありません。全国的にも数が減っているそうです(2024年3月21日)

Pick
Up

ハクビシン



夜に活動しているハクビシンのようすです。顔にある白い縦の帯と、太くて長い尾が特徴です。この森では久しぶりに記録されました(2024年3月11日)

一緒につくって みんなで食べる



比呂子さんの手づくり看板

115号で取材したココニールへ久しぶりに足を運ぶと、寺岡比呂子さん（49）のお弁当屋さんの看板が「〜FU・RE・RU〜」から「円・つぶら」に変わっていた。驚いて「お店の名前が変わってる」と思わず言うと、比呂子さんが「そうなの。お弁当は『円・つぶら』のほうがいいかなって」とにっこり笑った。比呂子さんの活動に何か変化があったのだろうか。気になってお話を聞くことにした。

「円・つぶら」に込められた意味

もともと「円・つぶら」とは、都留にある比呂子さんの自宅のことだったという。比呂子さんは2014年に都留へ移住し、今の家には2020年から住んでいる。この場所には、移住仲間が集まったり、お友だちが遊びに來たりしているようだ。

じつは、「円・つぶら」の名前を考えてくれたのは、当時、お米づくりに参加していた比呂子さんのお友だちだ。お米の「つづ」と、いろんな人が集まるようすから「彼ら、我ら」という言葉を合わせて「円・つぶら」と名付けたらしい。響きがかわいらしく、比呂子さんはすぐに気に入った。最初は「円（つぶら）」と表記して「円」の読み仮名が「つぶら」だと強調していたが、「円・つぶら」のほうが縁起の良い画数だということで表記を変更した。なんだか子どもの名前を決めるときのようで微笑ましい。

いっぽう「〜FU・RE・RU〜」は、比呂子さんがセラピストだったときに使っていた活動名だ。体にふれる、気持ちにふれるセラピストにはぴったりの名前だ。都留に来てか

らは、比呂子さんの活動内容が少しずつ変わっていった。お米づくりや農作業をしているうちに、育った食材で料理をつくって提供する機会が増えていったのだ。「まさか自分がお弁当屋さんになるとは、って感じだったから」と比呂子さんは本当に驚いたような表情で話してくださった。

「でも、『FU・RE・RU』っていうのは自分のなかにちゃんとあるんだよね。食べることを通してふれることが『円・つぶら』かな」。都留での暮らしは、人にふれる新しい方法を比呂子さんに教えてくれたのだ。

「つぶら食堂」での食事

比呂子さんは自宅で「つぶら食堂」というランチもやっている。比呂子さんのお弁当が大好きな私は、「ランチも気になる」と思っ

て参加してみることにした。

お昼ごろ、比呂子さんのお家に着くとリビングルームで話す声が聞こえる。すでに何人かお客さんが来ているようだ。「こんにちは」と挨拶をして部屋をのぞくと、はじめて会ったにもかかわらず「隣どうぞ、座布団使っ

ね」「大学生？私も今日始めて来たの」と

おしゃべりの輪に混ぜてくれた。「みなさん、お知り合いですか」と私が聞くと、そうではないという。お友だちのように楽しげに過ごしていたからその返答に驚いた。

キッチンからいい匂いがする。「できたよお」と比呂子さんがみんなに声をかけた。「今日のお料理は、大豆とキドニービーンズのチリコンカン、長芋キュウリの梅和え、紅生姜ポテト。車麴くるまこの唐揚げと、はじめてつくった生春巻きです。そして、お味噌汁と塩おにぎり」とごまおにぎりです。お盆には、きれいな食器に盛り付けられた料理が並んでいる。

「いただきます」。リビングの大きなテーブルを囲んで「おいしいね」と言葉を交わす。隣の和室では、ひとりで食事を楽しめるようになっていた。お客さん一人ひとりに合った食事の時間を過ごせるのは「つぶら食堂」の魅力だ。ランチのあとは、「あおぞら珈琲」のコーヒーと比呂子さんの妹さんがつくったパウンドケーキを食べて、話をしたり、ハンモックに揺られたりして自由に過ごした。

「つぶら食堂」には、おいしい料理があるだけではない。食べること、出会うこと、のんびりした時間を楽しめる場所だ。



「あおぞら珈琲」は、お友達の南美子なみこさんの活動だ。普段は、河口湖で自家焙煎のコーヒー豆を販売したり、コーヒーを提供している（比呂子さん＝写真提供）



お弁当を出すこともあるが、この日は定食だった。色とりどりの食器を使うこともポイントで、お客さんからも注目を浴びていた

こだわりのお米

「最近はおにぎりがおいしかったって言うてもらえることが増えてね」と比呂子さんが話す。「どんなお米を使っているのですか」と質問すると、「イセヒカリ」というお米を使っていると教えてくださった。

イセヒカリとは、伊勢神宮のコシヒカリが突然変異したものといわれている。1989年、伊勢湾台風のとくに2株だけ残った貴重な稲というエピソードがあつたり、奉納米とされていたりと縁起の良いお米だ。倒れにくいというのも特徴で、都留でも育てている農家さんが何人かいるそう。

「毎年、妹家族とか知り合いと一緒に田植えをするの。興味があつたらおいで」と比呂子さんが今年の田植えに誘ってくれた。アットホームで楽しいよ、と言う比呂子さんの笑顔につられて「やりたいです」と返事をする。田植えをするのは小学生ぶりだ。

田植え当日、よく晴れて気持ちのいい青空が広がる。集まったのは、比呂子さんの妹さん家族とお友だちの家族で、小学生が4人と大人7人、大学生が1人だ。「僕は2歳から

田植えやつてる」と小学6年生の男の子が教えてくれた。「すごいね、ベテランだね」。きつとここにいる小学生は私よりも田植えに慣れているだろうな。「この子は将来お米農家になりたいって言うてるんです」ともうひとりの男の子のお母さんが話す。男の子が田んぼに足を入れたくとうずうずしているのが伝わって、一緒に頑張ろうと気合いが入った。

都留でのお米づくり

田んぼに一列に並んで、目印を頼りに苗を植えていく。田んぼの泥のなかではうまく歩くことができないので、慎重に進む。午前中で半分ほどの作業が終わり、お昼休憩だ。みんなの緊張がほぐれていくのが分かった。

「農作業って、ひとりじゃできないよね」と比呂子さんがつぶやいた。「そうですね」と私が返すと、「でも、都留に来たばかりのときは、全部ひとりやるものだと思ってたんだよね」。比呂子さんの活動にはいつも人がいて、それを楽しんでいるように見えたからその言葉は意外だった。

比呂子さんの気持ちはどうして変化したのだろうか。比呂子さんは「都留に来てからが



火おこしを体験できる、だるまストーブ。秋には、これを使ってお米を炊くそうだ



田植えの日を一緒に楽しんだ小学生たち。自然が大好きで、比呂子さんの家に遊びに来ることもある



目印を動かしながら一つひとつ植えていく。息を合わせて進むことが大切だ

急展開」と話していた。あらためて、都留はどんな場所か思い返してみる。そういえば、今まで出会った都留の人びとはみんな自分のやりたいという気持ちに素直だった。そして、自分の大切な活動を、同じように頑張る人とつながって「一緒に頑張ろう」と声を掛けあっていた。きつと、比呂子さんの頑張るすがたを見た人びとが応援しようと「一緒に頑張ろう」の輪のなかに入れてくれたのだろう。

「みんなでやるのがいいなって、思えるようになったよ」。比呂子さんの表情は、田んぼの上に広がる空のように晴れやかだった。

* * *

『FU・RE・RU』って名前で活動しているときには、自分と向き合いますよねとか、自分を大切にしましょうとかがメインだったかもしれない。でも、『円・つぶら』は複数人での活動だから、できあがるものが大きくて。不特定多数に発信してるな。看板が変わって、いちばん変化があったのは比呂子さん自身の活動に対する気持ちだろう。

私は「円・つぶら」のさまざまな活動に参加して、たくさんさんの「円」が生まれているな

と思った。つぶら食堂に行ったときは、お客さんとの出会いの「円」が広がっていく。田植えをしたときは、助け合いの「円」を感じることができた。そして、比呂子さんの、食材を育てて、料理をして、お弁当を食べてもらう活動の繰り返しも「円」のように途切れることなく続いていく。

「私も、『円・つぶら』の『円』のなかに入れたかな」と言うのももちろんだよ」と比呂子さんが笑顔で答えてくださった。「円」には始まりも終わりもないから、少しの興味と好奇心だけで、誰でも、いつでも参加することができなのだ。これから先も、私のように比呂子さんのお弁当を好きになったことがきっかけで「円・つぶら」の「円」に仲間入りをする人が増えていくだろう。

渡邊結佳（国文学科3年） 文・写真



田植えが終わると、近くの水路で泥を落とした

楽しむことを 大切に



工房の看板を持つ真由美さんとハーブ畑。畑に近づくと、ハーブの香りがふわっと包み込んでくれる（2024年5月6日）

万能のハーブと呼ばれるトゥルシー。ストレス解消や老化の防止を手助けする効果がある。都留市^{しもや}下谷では、前田真由美さん（53）が「都留市で育ったトゥルシーを広めたい」という想いから、「ハーブ工房〜まーさんちの庭〜」を立ち上げた。はじめて聞くトゥルシーの名前に惹かれて真由美さんにお話をうかがう。

原優希（国際教育学科3年）＝文・写真
原口桜子（学校教育学科3年）＝写真

ハーブとの出会い

工房の窓から「まーさんちの庭 OKKO」と彫られた木製の看板が見える。横を見ると緑いっぱい畑が広がっていて、ここちよい風がすーっと通り抜けた。ここでハーブを育てているのだろうか。どんなハーブに出会えるのかわくわくする。真由美さんに挨拶すると、さっそく、ハーブを育て始めた当時のことを語ってくれた。

都留市はご主人の安正さん（55）が生まれ育ったまちだそう。甲府市^{こうふ}で仕事をしていたが、都留に帰って仕事がしたいと思い、真由美さんとともに都留への移住を決める。移住した土地は安正さんのお母さんのもので、広い畑までついてきた。「はじめは雑草だらけで」と畑を見ながらおっしゃった。ていねいに畑の手入れがされているため、雑草だらけだった当時のようすが想像つかない。

「ハーブって（どんな環境にも）強いイメージがあつて、そんなに手入れしなくてもいいんじゃないかなって思つて」。育てやすいイメージが、ハーブを育てるきっかけになったのだ。その後、ハーブを使った教室を開いて

いるかたのもとに通うようになると、ハーブの知識が増えていった。得た知識を生かして、自分が育てたいハーブを育て始めたという。

甘い香りに惹かれて

真由美さんがトゥルシーにはじめて出会ったのは、ハーブを使ったお菓子作りを始めたときだ。甘い香りがするこのハーブに、だんだん惹かれていったという。私のなかでハーブはさわやかな香りというイメージだ。人が魅了されるほど甘い香りなのかと、トゥルシーの香りを味わってみたくなった。

真由美さんは、トゥルシーを使ったお菓子作りを進めていくうちに、すばらしい効能をいくつも持つているハーブだと気づいたそう。トゥルシーの効能や活用方法、栽培方法などをまとめたB5サイズの紙を見せてくださった。両面にびっしりと文字が書かれた紙を見ると、私があらかじめ調べていて気づかなかつた効能がたくさん載っている。「トゥルシーって都留市^{つるし}に（響きが）似てない？」。そういえば、私がはじめてトゥルシーの名前を知ったとき、あまり馴染みのない名前なのにすぐに覚えられたことを思い出す。都留で

暮らしているから、この名前に親しみを感じ、自然に覚えられたのかもしれない。

ハーブのための環境づくり

「畑のほうも見てみますか」と畑を案内してくださった。畑には、ハーブ用に手作りした花壇が4つと、ハーブを地植えしている場所がある。一般的なハーブの栽培方法は鉢を使って育てるが、地植えで育てたほうがより



左：フェネル。真由美さんの腰の高さまで伸びている
右上：アップルミント。香りを楽しむハーブだ。軽く揉むと、リンゴのように甘く、ミントのすっきりした香りがする
右下：コモンマロウ。効能もあるが、真由美さんは色も楽しんでいる。お湯を入れると鮮やかな青色になる
上の写真はすべて2024年5月6日に撮影しました。

大きく育つという。地植えをしているハーブを踏まないようにゆっくり歩いた。

真由美さんが手作りしている花壇は「しがらみ花壇」と呼ばれ、竹や木をからませて作る。「竹は知り合いから、木は隣の家のおばちゃんちの木を庭師さんが剪定したものです。伐採していらなくなったと聞いたので、この木も資材としてもらっているんです」。

資材を身近な場所から集めていることを教えてくださいました。真由美さんと人とのつながりを感じる。他にも、ハーブが枯れた後の茎も使っているそう。捨ててしまう部分を活かすことで、新しい命につなげている。

花壇の作りかたについて詳しく尋ねる。ひとつの花壇を作るために、3人の大人の力で半日かかったそう。溝を掘って杭を打った後、木を組み上げる。そして、その内側に炭と落ち葉と土をミルフィーユ状にして積み上げた。完成。手の込んだ花壇はとても頑丈そう。しかし、花壇ができあがった後も崩れてしまったり、木が朽ちてきてしまったりすることがある。そのため、補正をすることが欠かせない。「土を」ふわふわさせておかないと水はけが悪くなってしまふし、根の硬



しがらみ花壇。花壇作りに挑戦したいかたに向けて講座も開いている（2024年4月21日）

さもハーブによって違うんです」。ハーブは毎日の管理が欠かせない植物なのだ。

小さな種から

ゴールデンウィークの最終日、ふたたび真由美さんのもとを訪れる。工房に着くと、作業服を身にまとった真由美さんがトウルシーの種を植えるための準備をしていた。

トウルシーの種は、遅霜が終わるゴールデンウィーク明けがまきどきだ。そして、7月から8月になると紫色の花を咲かせ、私たちに甘い香りを届けてくれる。今回はトウルシーの花を見たり、匂いを嗅ぐことはできない。けれど、あと二ヶ月を過ぎたら花が咲くのもかもしれない。そう思うとわくわくして待ちきれなくなった。



上：トウルシーの種はとても小さく、種をまくと風で飛んだり、雨で流れてしまったりすることがある。そのため房ごとまいている

下：乾燥したトウルシー

畑のほうへ行くと、種まきで使う連結ポットが4つ並べられている。すでに、3つのポットにはオクラと、つるなしインゲンの種が植えられていた。

真由美さんが何かが入った茶色の紙袋を持ってきてくださった。「ここに乾燥したトウルシーが入っていて」。カサつと音を立てて、真由美さんがトウルシーを取り出す。植物が乾燥すると簡単に粉々になってしまうそうだが、トウルシーは形が崩れることなく残っている。花の房は連なっていて、ネックレスのように見えた。

親指と人差し指の腹を使って花が咲く向きに茎を滑らすと、房は簡単に取れる。すーっと滑るように取れて、見ていて気持ちがいい。一本のトウルシーから取れる房は、手のひらにちよこつと山ができるほどだ。取れた房を指ですりつぶすと、ゴマよりも小さくて黒い種がポロポロとこぼれる。こんなに小さな種から紫色の花が咲くのかと目が丸くなる。

真由美さんの畑では、土に炭を混ぜたものを使っている。この土をポットのなかに入れ、上から房をまいていく。もう一度、上からふんわりと土をかけたら種まきの終わりだ。これから夏に入って陽の光をいっぱい浴びるだろう。元気に育ってほしいなと思いつつ、工房を後にした。

* * *

真由美さんと一緒にお話をしていくなかで、「何をしようか悩む前に、まずは自分が楽しもう」という言葉が心に残った。日々、正解が分からないなかで自分なりに工夫を凝らして、ハーブたちと向き合っている真由美さんだからこそ出てきた言葉なのだろう。私は分からないことがあるとすぐに、「自分に

はどうしようもできない」と決めつけてしまう癖がある。そんな私でも、まずは楽しむ気持ちを大切にすれば諦めずに続けていくことができるのだろうか。苦手なあのことに挑戦してみようかな、と考えが膨らんでいく。私も真由美さんのように、こだわりを持って何かに打ち込んでみたい。「まーさんの庭」に訪れて、何事も楽しむ気持ちを持って取り組むことの大切さを教わった。



右：花壇や種まきで使う土に混ぜている、粉状の炭
左：ブロック状の炭。しがらみ花壇に使われている

ムササビ 観察日記

いしぶね —石船神社へ—



本学地域交流研究センターでは、ムササビの巣箱にライブカメラを設置して観察を行っています。また、本学では年に数回ムササビ観察会を主催しています。ここ5ヶ月のあいだ、巣箱のなかでムササビは確認できていません。そこで、ムササビ観察会がはじめて行われた、都留市朝日馬場にある石船神社へ足を運びました。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

◆ 観察会のルーツ 石船神社

本学はじめてのムササビ観察会は、1980年ごろ、石船神社で行われました。ムササビが眩しく感じないように、ライトに赤いセロハンをつける観察方法もここで編み出されました。白い建物は2023年に閉校した旭小学校で、その隣にあるのが神社の木々です。



◆ 神社と森

ムササビは本来、寝床にする森と、食物が豊富にあるエサ場の森を行き来する動物です。石船神社の森（写真左側）と山すそ（写真右側）とのあいだには道路と川があり、神社で暮らしていたムササビが滑空して行き来するには距離があります。そのため、ムササビは境内のギンナンやケヤキの木の皮を食べていたようです。

◆ 地域の人とムササビ

写真の木はシラカシです。周囲の森と行き来ができず、神社に取り残されたムササビのために、地域の人たちが1983年に植えたそうです。その後も、食物となるカキ、カエデ、サクラなど、15本の木が植えられたそうです。枝のうえの箱は、旭小学校の子どもたちが設置しました。ムササビの食物となるドングリを入れることができます。



このページの写真はすべて 2024 年 6 月 6 日に撮影しました。

【参考書籍】「空中モグラあらわる」今泉吉晴 1993 年

「ムササビのすみ町」今泉吉晴『新編 新しい国語 四下』所収 1988 年

写真が教えて くれること



本学のまわりには、かつてどのような風景が広がっていたのだろうか。長く都留で暮らしてきた人にお話をききたい。このまちに越してきて1年が経ち、都留の昔のようににも興味を抱くようになった私は、昔のアルバムを持っているかたを探すことにした。

谷上碧（地域社会学科2年）＝文・写真

晴れた昼下がり、大学の西側にある、通称「オレンジロード」を歩いていると、本学グラウンドを眺める田中さん（82）がいらっしやった。こんにちと声をかけ、昔のアルバムを持っているかたを探していることを話すと、自宅でアルバムを大切に保管してあることを教えてくださった。「うちにあるからおいでよ」という田中さんの一言をきっかけに、ご自宅へお邪魔することになった。

玄関の前では奥さん（82）が田中さんの帰りを待っていた。「アルバムが見たいんだって」と田中さんが私を紹介すると、奥さんが「あらそうなの、いらっしやい」と笑顔で迎えてくれた。こうして、お二人に昔のアルバムを見せていただくことになった。

お二人が暮らししてきた都留

お二人が今の家に越してきたのは46年前のことだ。当時、谷村^{やむら}にあった本学が現在の田原^{たはら}に拠点を移し始めていた。まわりには桑畑が広がっていて、家屋もほとんどなかったのだという。今は隣に大きなアパートが建っていて、窓から見えるのはコンクリートの壁だが、当時は山が見えたそうだ。「学生より

もアオダイショウのほうが多かったのよ」と奥さんが言うくらい、ヘビがよく出たという。オレンジロードは今よりも細かったそうだ。今、お二人の家のまわりにはアパートが立ち並び、道もコンクリートで舗装されている。ヘビが出ていたなんて、想像もつかない。

古写真から記憶をたどる

「当時の都留のようすが写っている写真はありますか」とたずねると、2階にアルバムを取りに行ってくださった。そうして5、6冊、ページをめくりながら写真を探してくれた。結婚式や新婚旅行、社員旅行の写真が並ぶ。お二人の面影を探すのが楽しい。

当時の写真は人物を中心に撮ったものが多く、風景だけを写したものがほとんどなかった。写真を撮ることが今よりも特別だったからだろうか。それでも、少しでもまちのようすが写っている写真を探してくれる。

これはどうかしらと、奥さんが都留病院の入り口での一枚(右ページ)を見せてくれた。玄関の前に立つのは、当時の奥さんだ。

奥さんは岩手県出身だ。山梨県の病院の働き手が足りていなかった時期に、山梨県に越

してきた。そうして、都留でいちばん大きな病院である都留病院に勤めることになった。奥さんを皮切りに、岩手県から何人も都留へ越してきて、一時期は岩手県出身の職員がたくさんいた。「昔は(個人が営業する)私立病院が少なかったから忙しかったのよ」。病院の規模が大きかったため緊急外来も受け付けており、病床は50床から60床あったそうだ。他県から越してきた奥さんを、同僚や院長家族はあたたかく迎え入れてくれた。一緒に旅行へ連れて行ってくれるなど、とてもよくしてもらったという。



かつて都留病院があったと思われる場所に、現在は^{おおと}大戸内科医院がある(2024年6月11日)

お二人の話によると、都留病院は谷村にある「さんちよう商店街」に面していたそうだ。かつて、さんちよう商店街は都留の中心地だった。「商店街には^{とみ}十三の市というものがあつてね」と奥さんが教えてくれる。田中さんも「谷村のまちが大火でみんな燃えちゃつてね」と、火災があつたことを忘れないように、毎月13日に市をやっていたことを語ってくれた。みんなが行つて、すぐにぎわつていたのよ、とお二人が楽しそうに振り返る。

* * *

アルバムを眺めながら、奥さんが何気なくおっしゃった言葉が心に残っている。「久しぶりにアルバムを開いたよ。写っている人はもうほとんど亡くなつてしまつたけど、こうしてたまに見ると楽しいね」。写真は撮つて終わりではない。写真に残すことで、いつでも「そのとき」に戻ることができる。

それに、写真があつたからこそ、当時の都留を知らない私もその風景を想像できた。私にとっては当時のようすを思い描く手がかりになったのだ。写真は過去と現在をつなぐ存在なのだと、お二人の写真が教えてくれた。

都留のまち探検隊



都留はどんなところだろう
まちを知るために歩き出す

なじみのない土地で

「いいな」と思ったものを
じっくり見つめてみよう

ツバメを追いかけて

シバザクラに近づき

クワの実を食べてみる

そんな私たちはまるで探検隊
はじめての探検記録をお届けします



もくじ



都留の湧き水

44

坂を上って出会ったもの

45

すがたを変えても

石を見つめなおす

46

音を辿った先に

青いモミジの並木道

47

雨のなかの出会い

ツバメのすがた

48

大迫力の御神木

道端からのエール

49

果実、いろいろ

都留の湧き水

都留に来て感じた地元とのいちばんの違い、それは水だ。ここに来る前は、用水路は濁っているのがふつうだと思っていたが、都留ではどこも透き通っている。この水はどこから来ているのだろうか。家にやって来る前の水が見たくて、用水路をたどり、長慶寺近くの湧き水地へ向かった。

強い日差しを浴びながら、目的地が続く道を進む。近づくにつれ、水のせせらぎ、周りの木の青々とした色が、暑さを和らげてくれる。湧き水地に着くと、水面を覆うバイカモが目を引きつけた。白い花が緑色の葉を飾るすがたは、可憐で美しい。この水は特別なのだろうか。あとでバイカモは、きれいな水にしか生息しない植物ということを知った。

池の奥をのぞくと、岩のすき間から水が流れているのを見つけた。長慶寺の湧き水は、富士山に蓄えられ

た地下水が湧き出たものらしい。手を伸ばして飲んでみる。水道水よりも爽やかで、すっきりした味だ。蛇口を通る前の飲み水に、はじめて触れることができて嬉しくなり、思わず顔がほころぶ。湧き水を通して、少し遠くの富士山にたまった水が、身近に感じられた。

水の美しさは、都留へ来ていちばん強く感じた魅力だ。だからこそ、湧き水を直接すくい、味わった体験は、私とまちの距離を縮めてくれた気がした。

江袋巴（国文学科1年） 文・写真



水を飲んだところとは別の湧き水。水がとめどなく湧き出ている（2024年7月4日）



坂を上って出会ったもの

山に囲まれたこのまちは、生活のなかに坂がある。私の地元は台地だったため、坂の身近さに驚いた。坂を上った先には、どんな景色が待っているのだろう。

息を切らして本学東側の坂を上っていくと、サクラの木が目の前に現れた。ここで休もう。木陰に入って深呼吸をすると、甘い花の香りで肺が満たされる。サクラの花はもう散ったのに不思議だと思い、木陰を出て歩く。すると、白いハリエンジュの花を見つけた。これが甘い香りのもとのようだ。立ち止まらずに上っていれば、気に留めなかったであろう花に心が癒される。

さらに上ると、周囲は緑が深まっていく。そんななか出会ったのは、ハナミズキの木だった。白い花卉がうつすらとピンクに色づいていてかわいらしい。祖母の家にも植えられ



坂を上る途中で見た景色。まちのすぐそばに緑が広がっている（2024年7月3日）

ていた木だ。私は夏や冬にしか訪れないため、花を見たことがなかった。いつもかわいらしい笑顔を咲かせていた祖母の印象に、ぴったりの花だと知ることができてうれしくなる。

身近な坂を上ると、多くの植物と触れ合うことができた。この坂は私と自然を結びつける、かけ橋のように。そんな坂だからこそ見られる表情をもっと知りたい。明日はどんなものに出会えるだろうか。坂に上ることが、都留での日常になった。

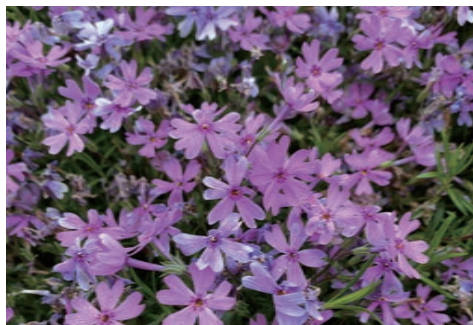
加納希珠（国文学科1年） 文・写真

すがたを変えても

4月中旬、都留バッテリーセンターの横を歩いていると、色とりどりの小さな花々が視界に入ってきた。調べると、シバザクラという花だとわかった。潮風に弱いらしく、海に近い地元では見ることができない花だ。新しい出会いに心が躍る。

花畑が忘れられず、ふたたびシバザクラを見に行く。建物の奥から「待っていたよ」と顔をのぞかせているようで、思わず笑みがこぼれる。花が少し枯れてきているが、まだ色鮮やかな花畑が広がっていた。

5月中旬の汗ばむほど暑い日、シバザクラのもとへ足を運ぶ。外に出ると、草のにおいがした。こんな日は、地元では潮のにおいがしたことを思い出す。久しぶりに見たシバザクラは、一面緑のみずみずしいすがたで、私を迎えてくれた。葉はツンと上を向いていて、とても凛々しい。



花びらを触てみると、ペーパーパウダーをつけたようにさらさらしていた（2024年5月17日）

太陽の光に照らされた葉は、触るとあたたかくて、思わず寝ころびたくなる。不思議と、花が枯れたことを惜しむ気持ちより、美しい葉を見ることができたうれしさが強くなる。シバザクラは春の花。花が枯れてしまえばもうおしまい。そう思っていたけれど、陽の光を浴びた葉は、とても輝いて見えた。「きれいなのは花だけじゃないよ」と言っているようなすがたは、私の心をぐつとつかんだ。

坂下実由菜（学校教育学科1年） 文・写真

石を見つめなおす

入居日の前日、都留市駅付近で見
たことのない石を見つけた。海があ

の砂浜で石を集めていた。懐かしさから手に取ってみる。

石は、黒に近い灰色で小さい穴が多くあり、ごつごつしている。地元によくある石は、青緑色でさらさらとした手触りだった。珍しい石が道

端にあることに驚く。後日、大学の授業で石の種類が溶岩石だと分かった。火山の周辺で採取できることが特徴で、滝で多く見られるようだ。

そこで、授業で知った夏狩地区の

滝を訪れた。滝から少し離れた場所の足元に、溶岩石らしき石があつた。手に取つてみると、表面が水流で削られたからか、手触りはなめらかだ。さらに滝の近くにある石を拾う。石の表面にはコケが生えていて、ぬめりがある。同じ溶岩石でも、最初に

手に取ってみると、表面が水流で削られたからか、手触りはなめらかだ。さらに灌の近くにある石を拾う。石の表面にはコケが生えていて、ぬめりがある。同じ溶岩石でも、最初に

滝から少し離れた場所で見つけた溶岩石。小さな葉の下には生きものが隠れていた（2024年5月23日）

見つけた石と滝で見つけた石とでは
触り心地が違う。石は、それぞれの

たのだろうか。石が冒険している光景が頭に浮かんだ。

の小さな違いに気づいた。まだ都留には知らないことが多い。だから、

この違いはきつと都留を知るきつかけになるはずだ。地元との違いを見つけないが、都留のことを一つひとつ知っていきたい。

島本彩音（学校教育学科1年）
 文・写真

な葉
(3日)

石。A
至5月



た溶
(202



で見
いてい



た場
のが



音を辿った先に

都留に来て一ヶ月が経つたが、緊張と不安はまだ消えない。重い足取

と、水の流れる音が聞こえてきた。
地元では聞くことのない軽やかな水

の音が心地よい。音を辿って歩いてみる。しばらくすると、ゴォーという激しい音に変わった。不思議に思つてさらに足を進めると、滝が現

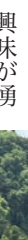
れた。住宅街の目と鼻の先に滝がある。予想外の光景に驚いた。

田原の滝を見ていると、緊張と不安が吹き飛んでいく。しばらく眺めた

すと、松尾芭蕉の句碑
が目に入る。先日、大



ぼったので、興味が湧いた。春の訪れを喜ぶ



芭蕉の句を読んで、大



かつて芭蕉が句の題材に詠んだ田原の滝（2024年5月29日）

学生生活を心待ちにしていた気持ちを思い出し、胸が高鳴った。

身近な場所に滝があることが不思議で、何度も足を運ぶようになった。天気や時間によって変わる滝の景色や水の音が面白い。滝の水が太陽の光を反射するようすには心を奪われた。雲の隙間から光が差し込み、水面が輝くのを見ると、たちまち清々しい気持ちになる。

田原の滝は不安でいっぱいだった私の心を和らげてくれた。気づけば気分も明るくなっている。これから大学生活、困難なこともあるだろう。そんなときは、この場所にふたたび訪れたい。

西田伊吹（国文学科1年） 〓 文・写真

思い出し、胸が高鳴った。

議で、何度も足を運ぶようになった。
天気や時間によつて変わる滝の景色

光を反射するようすには心を奪われた。雲の隙間から光が差し込み、水

面が輝くのを見ると、たちまち清々しい気持ちになる。

田原の滝は不安でいっぱいだった私の心を和らげてくれた。気づけば

気分も明るくなっている。これから
の大学生活、困難なこともあるだろう

たび訪れたい。

西田伊吹（国文学科1年） 文・写真



素材に詠ん
(29日)



て芭蕉が
童（2024）

かつ
原の

かつて芭蕉が句の題材に詠んだ田原の湊（2024年5月29日）

謝安石 (2004: 1-7) 指出，

西田伊吹（国文学科1年）
Ⅱ文・写真





青いモミジの並木道

入学式が終わり一週間ほど経ったころ、私は本学の敷地内にある生協の店舗を目指して歩いていた。入り口へ続く道に背の高い木が連なり、色濃く影を落としている。葉を見てすぐにモミジの木だと分かった。空を覆いつくさんばかりの葉は、陽光に目いっぱい照らされていた。風が吹くと、さらさらと葉の擦れる音がする。柔らかな木漏れ日が差し込むこの並木道に惹かれて、何度も足を運ぶようになった。

曇った風の強い日、モミジの種を採って観察していたときのことだ。種をじつと見つめ、ふと顔をあげる。するとモミジの枝葉が目前に迫ってきて、思わずドキッとした。風で枝が降りてきたのだ。モミジの葉がいくつもの人の手に見え、種を返してくれと訴えているようだった。申しわけなくなり、怖くもなった。



生協前のモミジ並木。勢いよく伸びた枝の下を歩くとトンネルを抜けていくようだ（2024年6月9日）

右田ゆずる（国文学科1年）
Ⅱ文・写真

入学したばかりのころ、私にとつてこの並木道はのどかな風景だった。しかし今は、どこか謎めいた雰囲気をもった場所でもある。私の心をざわつかせたからだろう。並木道に通ううちに、モミジは日によってさまざまな表情を見せる木だということが分かった。

今ではモミジの葉を眺めるのが、毎日のひそかな楽しみだ。今日も胸を踊らせながら、ゆつくりと並木道を歩いていく。

雨のなかの出会い

谷村にある銀行に行くために、大雨のなか家中川治いを歩いていた。服が濡れ、憂うつになりながらも足を進めていると、ちらりと赤いものが目に入る。立ち止まって、家中川をのぞきこむと、コイが泳いでいた。思わず「えっ」と声が出る。まちを流れる川に生きものがいるなんて、はじめて見る光景だった。

数日後、家中川のコイが忘れられず、また川治いを歩く。コイを探している、3匹のカメを見つけた。台の上でひなたぼっこをしているカメは、首をぐんと伸ばして動かない。じつと見つめ続けても、ぴくりともしない。生きているのか不安になったが、のどが動いてほつとした。

後日、私はまた彼らに会いに行った。もう何回も観察にきているから、道順はぼつちり覚えている。川をのぞきこむと、はつとした。台の上に



カメが口を大きくあけている。小さな恐竜のように見えて、かわいらしい（2024年6月5日）

森田夢乃（学校教育学科1年）
Ⅱ文・写真

ずらりとカメが並んでいたのだ。訪れるたびに変わるカメの数を数えることが、私の楽しみになっている。数えてみると11匹もいた。その多さに驚いて、「いつたい今までどこにいたの」と問いかけた。

いつしか、今日はどんな生きものがいるのだろうか、わくわくしながら家中川に足を運ぶようになっていた。大雨のなか歩いたあの日から、家中川の生きものたちが私の心を晴れやかにしてくれている。

ツバメのすがた

家から大学に行くまでに何羽ものツバメとすれ違ふ。目で追うと、真つ

直ぐに飛んでいないことに気づく。くるりと自由に空を飛ぶツバメのすがたを羨ましいと感じ、心惹かれた。

5月8日、自宅の駐車場をツバメがせわしなく出入りしていた。口に枯れ草をくわえているため、巣作りをしているのだろう。朝が苦手な私は、憂うつな気持ちで自宅を見たが、ツバメの一生懸命なすがたを見て「今日の授業も頑張ろう」と思えた。その日から、ツバメを見て大学に向かうことが日課になった。

5月14日、巣を見に行くと、重さに耐えられなかったのか、地面に落ちてしまっていた。この場所でツバメを見ることができないと思うと、とたんに悲しくなる。巣を失ったツバメはこれからどこで暮らしていくのだろうかと思ひになった。ツバメ

を観察し続けていなければ、巣が落ちて心が痛むこともなかっただろう。ツバメと私の距離が少し近づいたからこそ、ツバメの気持ちに寄り添えたのかもしれない。

はじめはツバメが自由に飛ぶように心惹かれた。いつのまにか、小さな体で懸命に巣作りするすがたに、元気づけられるようになった。今日は何羽のツバメとすれ違ふだろう。これからもツバメをそつと見守り続けたい。

山口夏美（学校教育学科1年）
〓 文・写真



エサを取りに向かうため羽を広げるツバメ。巣ではヒナが待っているのだろうか（2024年6月7日）

大迫力の御神木

ひとり暮らしを始めて、散歩や買い物などで歩く機会が増えた。歩きたびに、都留は緑があふれていると感じる。ある日、川棚にある勝山八幡神社の大きな御神木と出会った。幹は両手を広げても測りきれないほど太く、見上げててもつぺんは見えない。今までに見た木とは比べものにならないような迫力に、心をつかまれた。

ふたたび神社を訪れると、参拝に来ていた市民のかたが「何年も前、この木に雷が落ちたことがあるのよ」と教えてくれた。たしかに、一本の太い枝の切り口が焦げている。幹にそつと手を当てると、手で触れた幹の表面がポロポロと崩れてきた。これも、雷が落ちた影響なのだろうか。

青伸びをすると若葉に手が届いた。明るい緑色をしていてやわらかい。太陽の光が、みずみずしさを引き立てている。そんな若葉のすがたは、新生活が始まって悩みばかり抱く私に元気をくれた。

はじめて御神木と出会ったとき、その大きさに心惹かれた。足を運ぶうちに、雷が落ちても倒れることなく、今でも若葉を茂らせていることを知った。辛いことがあったとき、あの元気な若葉を思い出そう。そして、勇気をもらって前へ進もう。これからの都留での成長を、御神木に見守っていてほしい。

山本幸平（学校教育学科1年）〓 文
（北原日々希〓写真提供）



両手で測ると、幹周りは6メートルを超えていた（2024年6月17日）



道端からのエール

5月も終盤に差しかったころ、

道端のタンポポが綿毛になつて飛ぶのを見つけた。風を受けて今にも飛び立とうとしている綿毛のすがた

都留で暮らし始めて数日、見知らぬ土地への不安を和らげようと、はじめての散歩に出かけた。ぽかぽかと暖かい日差しの中を歩いていると、道端にちいさな黄色の花が咲いていることに気づく。タンポポだ。幼いころ、綿毛をふーつと吹いて遊んだ懐かしい記憶がよみがえる。見慣れたその花が、どこか落ち着かなかつた私を安心させてくれた。

4月下旬のある日、キャンパスの一角でたまたま、カントウタンポポの花を見つけた。日本固有種のカントウタンポポが自生しているのは、自然豊かな都留でも珍しいという。カントウタンポポとの出会いに驚いたと同時に、キャンパス内で貴重な体験ができたことに心がはずんだ。



凛と立つタンポポのすがたに思わず息をのむ (2024年5月18日)

若槻温 (比較文化学科1年)
|| 文・写真

果実、いろいろ

4月上旬、買い物に行く途中で、

見覚えのある葉を見つけて足を止めた。イチゴだ。昔から、果実を探したり育てたりすることが好きだったため、すぐに分かった。ほかに果

実はないのかな。好奇心のままに探してみると、楽山公園の入り口近くでイチゴを、やまびこ競技場近くでクワの実を見つけた。

3つの果実のなかで、クワの実だけ食べたことがない。どんな味だろう。実が熟すのが待ち遠しくて何度も足を運ぶうちに、あちこちにクワの木が生えていることに気づく。調べてみると、都留では養蚕業が盛

だったようだ。蚕はクワの葉を食べる。エサのために植えられたのだろうか。蚕を育てる人もクワの実を食べていたのかな、と想像がふくらむ。

6月上旬、熟したクワの実を採りに行く。はじめて食べたクワの実は

酸味がまったくなく、とても甘い。

イチゴやイチゴとくらべても、クワの実の甘さは格別だ。おいしさに

つられ、つい採りすぎてしまった。

最初は、どんな味が確かめたくて果実を探した。そうして見つけたクワは、おいしさだけでなく、かつて

の都留について考えるきっかけをくれた。都留の自然や人びとの生活は、

知らないことばかりだ。食べたことのない果実もある。これからひとつずつ見つけていこう。

脇田晃納環 (国文学科1年)
|| 文・写真



採ったクワの実でジャムを作ってみた。素朴な甘みで、種のプチプチとした食感が楽しい (2024年6月8日)

フィールド暦



新緑の季節がやってきました。動物が活発に動き出し、植物が葉や花をめいっぱい輝かせています。都留ではどんな生きものが見られるのでしょうか。今年の4月から6月のあいだに、キャンパスとその周辺で観察できた生きものを紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



モリアオガエル

4号館前のビオトープに去年から卵を産むようになりました。今年は5月25日に卵塊を確認しました。
(2024年6月10日・本学4号館前)

ウスバシロチョウ

アゲハチョウのなかまです。草原の環境を好みます。茨城県では絶滅危惧種の指定を受けています。

(2024年5月10日・本学うら山)



スズムシソウ

今年もキャンパスうら山でスズムシソウに出会えました。山梨県内でもそのすがたを見ることができる場所はほとんどありません。
(2024年4月30日・本学うら山)

ニホンジカ

近年、キャンパス周辺で見かけるようになりました。耳が大きいのが印象的でした。体の白い斑点付近から夏毛になりつつあるようです。

(2024年5月17日・本学うら山)





アカスジキンカメムシの幼虫

うら山で出会いました。成虫になると、光沢のある緑色に赤色の斑紋が映え、とてもきれいです。

(2024 年 5 月 12 日・本学うら山)



セセリチョウのなかま

セセリチョウのなかまは、体が小さいこともあり識別が難しいチョウです。春から秋にかけてキャンパスでよく見かけます。

(2024 年 5 月 29 日・本学 4 号館前)



ヒメウラナミジャノメ

6 月ごろから、キャンパスの草地で見かけるようになります。ふわふわと飛ぶことやヘビのような羽の模様が特徴です。

(2024 年 6 月 10 日・本学 4 号館前)



ルリタテハ

名前のとおり、羽の縁に^{みち}瑠璃色の^{るりいろ}帯模様が入るのが特徴です。キャンパスでは 6 月ごろからすがたを見かけます。

(2024 年 6 月 10 日・本学 4 号館前)



ナナフシ

オスははまだ発見されておらず、メスだけで卵を産むのが特徴です。うら山の木の上にいるところを見かけました。

(2024 年 4 月 19 日・本学うら山)



テンの糞

うら山の遊歩道で記録しました。糞には、クワの実の種と推測されるものがたくさん入っていました。

(2024 年 6 月 8 日・楽山公園)

都留の風景写真集

————— このまちを楽しむ

花が咲き、優しい香りに誘われてまちを歩くと、都留を楽しむ人のすがたがありました。聞こえてくる音や肌に触れる風のあたたかさを思い浮かべながら、都留の風景をお楽しみください。

久永奈央（地域社会学科2年）＝文 『フィールド・ノート』編集部＝写真



①	
②	③

①お花見日和 なかまち 仲町公園にて（2024年4月10日）

②昼休みに響くジャズ 本学赤レンガ広場にて（2024年5月10日）

③手動の踏切遮断機 とおかいちば 十日市場にて（2024年5月12日）



放課後の楽しみ にのがわ 二ノ側公園にて（2024年7月3日）

FIELD NOTE

no. 117 Jul.

発行人

北垣憲仁

統括編集者

西教生

編集長

原優希 (2-3,36-38)

渡邊結佳 (32-35,42-43,54)

副編集長

久永奈央 (14-16,28-29,52-53)

横山幸乃 (6-7,20-21,39)

編集

原口桜子 (4-5,25-27,36-38)

印南響 (1,22-24)

北原日々希 (17-19,28-29,48,55)

高橋美唯 (8-10,30-31)

谷上碧 (40-41,50-51)

根本菜桜 (6-7,11-13,56)

江袋巴 (42-49)

加納希珠 (42-49)

坂下実由菜 (42-49)

島本彩音 (42-49)

西田伊吹 (42-49)

右田ゆずる (42-49)

森田夢乃 (42-49)

山口夏美 (42-49)

山本幸平 (42-49)

若槻温 (42-49)

脇田晃納環 (42-49)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE (フィールド・ノート) 117 号

発行日: 2024 年 7 月 29 日

発行部数: 3500 部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail:

fieldnote.2020@gmail.com

編集後記

「夏っていいな」と思うとき

入り口の自動ドアが開くと、そこはまるで天国。太陽がぎらぎらと照りつける夏は、スーパーマーケットのありがたみを感じる季節です。汗だくになって辿り着いた私を、よく冷えた空気が包み込みます。涼しい店内をゆっくりと回り、気づけばアイスがカゴのなかに。気になる味の商品はいっしょに買ってしまう。アイスがおいしいのはやっぱり夏だなあ。そんなふうに思いながら、炎天下を歩くことを先延ばしにしています。(印南響)

道を歩いていると、いろいろな音が聞こえます。木の上では、セミがミンミンと鳴き、夜の田んぼでは、カエルがゲコゲコと鳴いています。窓を開けると、車の音に混じって、かすかに動物たちの鳴き声がします。夏に近づくにつれて、町中がにぎやかになっていくのが好きです。もちろん、動物たちの元気な声を少しうるさいなと思うこともあります。けれど、騒がしい夏の音は私に活力を与えてくれます。(根本菜桜)

雲ひとつない青空が広がっていると、むしように外へ出て遊びたくなります。炎天下で部活動をしていた高校生のころは、学校近くのコンビニエンスストアで買ったアイスを片手に、散歩をしたり、近くの海で遊んだりしていました。部活動の仲間とは今でも仲が良く、今年の夏休みは一緒にバーベキューや花火を楽しみました。今年はアスレチックやプールに行って、思い切り体を動かしたいな。いまから夏が待ち遠しいです。(高橋美唯)

次回予告

届ける (仮) 2024 年 12 月発行予定



『フィールド・ノート』の活動は、都留の文化や自然を冊子にして
読者のかたへ「届ける」ことです

冊子を読み返すと、

素材を生かしたおいしい料理でお腹を満たしてくれるかたがた

都留の自然に心惹かれて句を遺した偉人たち

都留にはたくさんの「届ける」があることに気づきました

次号では、「届ける」ことを通して生まれる、人のつながりや想い、
もの作りへのこだわりを探しにいきます

／ フロッタージュで葉の模様を描こう ／

フロッタージュとは、絵画の技法です。

表面にでこぼこがあるものの上に紙を置き、色鉛筆などの描画材でこすります。

すると、表面のでこぼこが模様となって、紙に写し取られます。

本学周辺で見つけた葉の模様をフロッタージュしてみました。



マタタビ



イチヨウ



クロモジ

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。